

## 教育実習への期待感と事前準備が女子短期大学生の実習での 評価および保育者効力感に及ぼす影響

清水 陽香<sup>1</sup>・福井 謙一郎<sup>2</sup>・中島 健一郎<sup>3</sup>

Effects of expectations and preparations for teaching practice in kindergartens  
on the performance and the pre-school teacher-efficacy of women's junior college students

Haruka SHIMIZU · Kenichirou FUKUI · Kenicirou NAKASHIMA

### 問 題

近年、保育所や幼稚園といった幼児教育の現場への社会的なニーズが強まり、保育者養成校には、保育者の保育能力の向上が強く要請されるようになってきている(松田・設楽・濱田, 2016)。一方で、保育士の有効求人倍率は2019年7月時点で2.68倍となっており、保育者の不足は多くの自治体で問題となっている(厚生労働省, 2019)。保育能力の高い保育者を養成することは、全国的な喫緊の課題であると言える。

保育者養成校の学生が、実際に保育者として働くことを促進する要因の1つとして、保育者効力感が考えられる。保育者効力感とは、「保育場面において、子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為を取ることができるという信念」である(三木・桜井, 1998, p. 83)。これは、子どもの発達のために望ましいと思う保育を実行に移すことができると考えている程度と言い換えることができる。保育者効力感に関する研究は、Bandura (1977) の自己効力感理論に基づいている。Bandura (1977) によれば、人は何らかの課題に取り組むとき、課題を達成できそうかどうかについての期待を持つ。このとき、自分がある目標達成のために行動できるという確信を効力期待といい、ある行動をとったときに目

標となる結果が得られるかどうかの評価を結果期待という。Bandura は個人によって知覚された効力期待を自己効力と呼び、達成場面における重要性を指摘している。保育者養成においては、保育者効力感が就職先の選択と関連することが明らかになっている(神谷, 2009)。したがって、社会で働く保育者の数を増やし、かつ保育者としての力量を伸ばすためにも、学生の保育者効力感を高めることが重要であると言える。

三木・桜井(1988)によれば、保育者効力感は保育実習、教育実習などの実習経験によって変動する。実習経験が保育者効力感に及ぼす影響については、国内でも数多くの研究がおこなわれている(e.g., 藤崎・松永・溝川・杉山・井, 2018)。それらの研究では、全体として実習後には実習前よりも保育者効力感が高くなることが示されている。この点について小河・長屋(2015)は、保育職への理解や適性度が高いほど、保育者効力感が高いことを明らかにしている。実習はこうした理解や適性度の自己認識へと繋がることで、効力感を高めるに至っていると考えられる。

ところで、一般に実習の前にはそのための準備が行われる。そして、どのような準備を行うかには、学生の実習に対する態度が影響することが予測される。実習が保育者効力感に繋がるためには、

<sup>1</sup> 日本学術振興会

<sup>2</sup> 長崎女子短期大学幼児教育学科

<sup>3</sup> 広島大学教育学研究科

学生が実習に対して前向きに取り組み、十分な準備を行うことが重要であると考えられる。事前に準備を行った上でなければ、実習によって小河・長屋 (2015) が指摘するような理解や適性が高まるとは考えにくいためである。しかし、これまでに実習のための準備に学生の実習への態度が及ぼす影響について検討した先行研究はみられず、ここで述べた可能性が未検討のまま残されている。保育者養成校において実習指導を行う上でも、どのような態度の学生がどういった準備を行っているのか、またそれが効力感にどのように繋がるのかを明らかにすることは有用である。効力感の向上に繋がるような態度や準備の傾向が分かれば、実習前の指導において教育者が注意すべき点についての示唆が得られるためである。

学生の態度に関して、長谷部 (2007) は、実習への期待感に着目する必要性を指摘している。ここでの期待感とは、実習の意義の認識や、実習に対する意欲・期待感のことを指す。長谷部 (2007) によれば、多くの学生が実習に対して意義を感じるといった望ましい態度を有している一方で、半数近い学生が実習に対する忌避的な感情を持っている。そして、こうした忌避的な感情が、実習に対する回避的な対処を引き起こす可能性が示唆されている。しかし、実際に期待感が準備に対してどのような影響を及ぼすのかは明らかになっていない。さらに、実習への期待感や準備は、実習先での評価や学生自身の自己評価にも影響することが考えられる。前向きな態度を持ち、積極的な準備を行う学生は評価も高い一方で、そうでない学生は評価が低くなることが予測される。また、そうした評価が効力感に影響する可能性も十分に考えられる。

以上をふまえ、本研究では学生の実習に対する態度が準備に及ぼす影響、またそれらが実習での評価と効力感の変化に及ぼす影響について、女子短期大学幼児教育学科の学生を対象とする質問紙調査によって検討を行う。

## 方 法

**参加者** 私立女子短期大学の2年生が調査に参

加した。教育実習前後の調査の両方に参加した89名のデータを分析に使用した。平均年齢は19.56歳 ( $SD=3.26$ ) であった。

**手続き** 実習前の調査は、幼稚園、認定こども園等での教育実習の約1週間前の講義終了後に実施した。効力感、実習のために行っている準備、実習への期待感を測定した。実習後の調査は教育実習終了から約1週間後の講義終了後に実施した。効力感を測定したのち、年齢の回答を求めた。調査に用いた尺度については後述する。また実習前、実習後の両方の調査において、データのマッチングのため学生番号の回答を求めた。

いずれの調査でも、調査への回答は任意であり途中で回答をやめることができること、回答しないことによる成績や学業上の不利益はないこと、回答は統計的に処理されるため個人が特定されることはないことを説明した上で、調査を行った。一斉教示・個別回答による集団調査であった。

**測定指標** 効力感の測定には、保育者効力感尺度 (三木・桜井, 1998) を用いた (e.g., 「子どもに分かりやすく指導することができる」)。15項目について6件法で回答を求めた。準備については、テスト対処方略尺度 (外山, 2005) の項目を実習に適した表現に修正して使用した。項目の修正に際しては、実際に保育園あるいは幼稚園で働く保育士2名、幼稚園教諭1名に協力を依頼し、回答に支障がない項目内容になっていることを確認した。「これから行く幼稚園実習についてお尋ねします。あなたは幼稚園実習に向けて、今現在どのように考えたり行動したりしていますか。」と教示し、20項目について6件法で回答を求めた。実習への期待感の測定には、実習期待感尺度 (長谷部, 2007) を用いた。実習忌避 (e.g., 「実習中のことを想像するとゆううつな気分になる」)、意義 (e.g., 「実習は、将来保育者となるための大切な学習の機会だと思う」)、出会い (e.g., 「実習で、子どもたちと会うことが楽しみである」) の3つの下位尺度からなり、7項目について6件法で回答を求めた。

実習での評価については、各実習先の担当者が各学生を5点満点で評価した得点を指標として用

いた。また学生の自己評価については、実習後に学生が自身の勤務状態、指導を受ける態度、保育者としての態度、責任感、計画性、保育支援技術、観察力の7項目について5点満点で評価したデータを使用した。

## 結 果

### 尺度の因子構造の検討と尺度得点の作成

実習への準備を測定した尺度について、原版から項目の修正を行ったため、因子構造の再検討から行うこととした。MAP (Minimum average partial correlation; 最小平均偏相関) を基準とし、因子数を3と指定した上で最尤法 (プロマックス回転) による探索的因子分析を行った。因子分析の結果および $\alpha$ 係数を Table 1 に示す。

第1因子は「準備の仕方を工夫する」「実習に向けて対策を立てる」など、実習に対して積極的

な準備を行う内容の項目が含まれたため、積極的準備因子とした。第2因子は「無理にでも忘れようとする」「頭に浮かべないようにする」など、実習について考えることを抑えようとする内容の項目が含まれたため、思考抑制因子とした。第3因子は「気晴らしに他のことをする」「なるようになれと思う」など、実習に対して向き合うことを避ける内容の項目が含まれたため、回避因子とした。以上の因子構造に基づき、積極的準備得点、思考抑制得点、回避得点を作成した。

実習期待感尺度については、長谷部 (2007) の因子構造に基づいて確認的因子分析を実施した。適合度は許容範囲であった (CFI = .93, RMSEA = .07, SRMR = .07)。そのため、長谷部 (2007) と同様、実習忌避得点、意義得点、出会い得点を算出した。 $\alpha$ 係数は順に.70, .88, .69であった。

保育者効力感尺度については、実習前、実習後

Table 1  
準備尺度の因子分析結果 (最尤法、プロマックス回転)

項目	F 1	F 2	F 3	共通性
<b>F 1 積極的準備</b>				
2 準備の仕方を工夫する	.78	.15	-.34	.60
6 実習に向けて対策を立てる	.75	.03	-.15	.54
7 誰かに話を聞いてもらい、気持ちをほらす	.73	.07	.05	.55
16 これまでの経験を踏まえて、どのようにしてゆくべきかを考える	.62	-.15	.14	.46
20 誰かに話を聞いてもらい、どうしたらよいか考える	.59	-.04	.30	.49
12 誰かに話を聞いてもらい、励ましてもらう	.58	.18	.06	.38
8 大学での指導にそって準備する	.53	.00	.02	.28
13 先生や友達などに実習の準備について相談をする	.52	-.18	.16	.35
<b>F 2 思考抑制</b>				
9 無理にでも忘れるようにする	.17	.88	-.06	.75
19 頭に浮かべないようにする	-.14	.80	.09	.74
10 あまり考えないようにする	-.16	.72	.12	.64
15 ささいなことだと考える	.09	.69	-.02	.46
11 失敗しないと気楽に考える	.06	.45	.05	.23
<b>F 3 回避</b>				
14 気晴らしに他のことをする	-.02	.21	.64	.55
5 なるようになれと思う	-.04	-.03	.64	.39
4 気晴らしに友達と遊ぶ	.14	.09	.56	.40
17 楽しいことを考える	.26	-.15	.54	.38
3 どうにでもなれと思う	-.12	.18	.47	.32
因子寄与	3.61	3.26	2.62	
因子間相関				
F 1	1.00	-.10	.16	
F 2	-.10	1.00	.36	
F 3	.16	.36	1.00	
$\alpha$ 係数	.84	.84	.75	

のそれぞれで三木・桜井（1998）の因子構造に基づき確認的因子分析を実施したが、適合度は基準を満たさなかった。しかし、信頼性はいずれも高い水準にあったため（実習前： $\alpha = .83$ 、実習後： $\alpha = .85$ ）、1因子で効力感得点を作成した。

また、学生の自己評価については、7項目の信頼性を算出したところ  $\alpha = .79$  と許容可能な値を示したため、7項目の平均得点を自己評価得点として算出した。

### 実習期待と準備が実習での評価と効力感に及ぼす影響

効力感について、実習前の効力感得点を説明変数、実習後の効力感得点を目的変数とする単回帰分析を実施し、残差得点を効力感の変化量として分析に使用した。

分析に使用した各変数の記述統計量および単相関分析の結果を Table 2 に示す。

実習期待と準備が実習での評価と効力感の変化

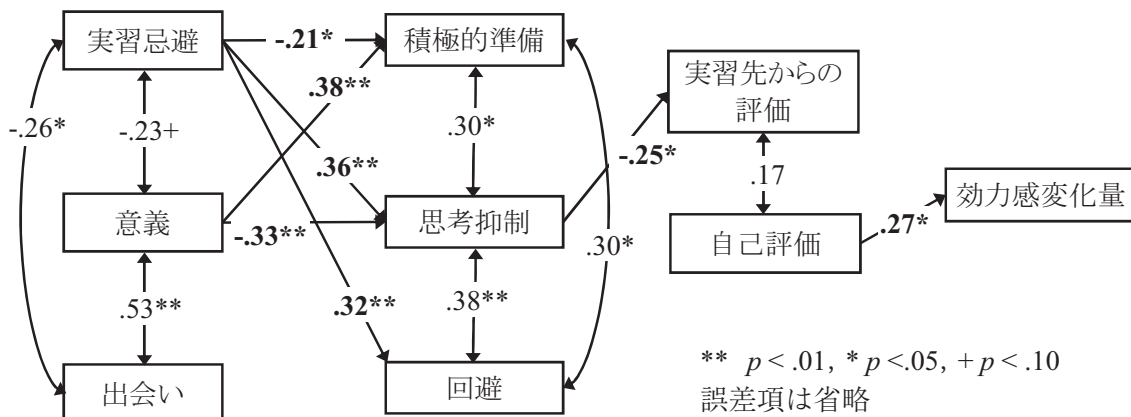
に及ぼす影響を検討するため、構造方程式モデリングに基づくパス解析を行った。単相関分析 (Table 2) において有意な相関が示された変数間にパスを引き、パス係数が有意なパスのみを残したモデルを最終モデルとした (Figure 1)。モデルの適合度は許容範囲であった (CFI=1.00, RMSEA=.01, SRMR=.10)。

パス解析の結果、実習忌避は積極的準備との間に負の関連 ( $\beta = -.22, p = .04$ )、思考抑制との間に正の関連 ( $\beta = .36, p < .001$ )、回避との間に正の関連を示した ( $\beta = .32, p = .01$ )。意義は積極的準備との間に正の関連 ( $\beta = .38, p < .001$ )、思考抑制との間に負の関連を示した ( $\beta = -.33, p = .001$ )。また、思考抑制は実習先からの評価との間に負の関連を示した ( $\beta = -.25, p = .03$ )。さらに、自己評価が効力感の変化量との間に正の関連を示した ( $\beta = .27, p = .04$ )。

Table 2  
パス解析に使用した変数の記述統計量および単相関分析結果

	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 実習忌避	3.85	1.05	1.00							
2. 意義	5.75	0.41	-.25*	1.00						
3. 出会い	4.85	0.68	-.25*	.60**	1.00					
4. 積極的準備	4.39	0.66	-.30**	.44**	.35**	1.00				
5. 思考抑制	2.51	0.93	.39**	-.34**	-.20+	-.02	1.00			
6. 回避	3.65	0.79	.33**	.01	.03	.20+	.39**	1.00		
7. 実習先からの評価	3.64	0.79	-.22*	.12	.15	.07	-.24*	-.10	1.00	
8. 自己評価	3.43	0.53	-.14	.06	.12	.05	-.09	.09	.23*	1.00
9. 効力感変化量	0.00	0.40	.12	-.16	-.15	.03	-.04	.21+	.11	.28**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .10$



\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$   
誤差項は省略

Figure 1 実習期待と準備が実習での評価と効力感に及ぼす影響

## 考 察

本研究の目的は、保育者養成校の学生の実習への期待と実習に向けた準備との関連、またそれらと実習での評価および学生の効力感の変化との関連を明らかにすることであった。

パス解析の結果、実習期待の中でも実習忌避が積極的な準備の少なさに繋がること、また実習について考えないようにする、準備を回避することと繋がることが示された。一方で、実習に意義を感じている学生は積極的に準備を行い、考えないようにする程度が少ないことも明らかになった。さらに、実習について考えないようにする学生ほど、実習先での評価が低いことも示された。

実習忌避は、実習に対するゆううつな気分の程度を反映している（長谷部，2007）。そのような気分の強い学生にとって、実習について考えることはゆううつな気分を生起させることになる。したがって、積極的な準備を行わず、実習について考えることを避けるために、結果として実習先からの評価が低くなることが示唆される。

一方、パス解析において効力感の変化量との間に有意な関連を示したのは、学生による自己評価のみであり、自己評価が高いほど効力感が高まっていた。このことは、学生の効力感、すなわち自分が保育者としての仕事をこなすことができるという見込みを高めるには、学生自身が実習で「うまくやれた」という感覚を持つことが重要であることを示唆する。

以上をふまえると、実習指導を行う上では、次のような点に着目する必要があると考えられる。まず、実習に対して忌避感を持っている学生に注意を払うことである。そうした学生は実習に向けた準備に積極的に取り組めず、むしろ考えないようにしたり、準備を避けたりするような行動を取りやすいことが本研究の結果から示唆される。そうした学生に対しては、忌避感を低減するような教育者の声かけや、準備と一緒に取り組む機会を作るなどのかかわりが重要であると考えられる。

次に、学生自身が実習についてどのように評価しているかに注意を払うことである。自己評価と実習先からの評価は、単相関分析では弱い相関を

示したが ( $r = .23, p = .03$ )、パス解析では共分散は非有意であった。したがって、実習先からの評価が高くて、学生自身が自己を高く評価しているとは限らない。学生自身が肯定的な自己評価を持っていないと、実習先で高く評価されたとしても効力感の向上にはつながらない可能性が考えられる。実習後には学生の自己評価も測定し、実習先からの評価と自己評価がずれている学生がいないかどうか、特に実習先からは高く評価されているにもかかわらず自己評価の低い学生がいないかを確認し、そのような学生に対して適切な自己評価を持てるような働きかけをする必要があると考えられる。

最後に本研究の限界点について述べる。本研究では、学生の自己評価が効力感を高めることは示されたが、どのような要因が自己評価の向上に繋がるかは明らかにならなかった。この点については、今後のさらなる検討が必要であると考えられる。

## 引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 藤崎真知代・松永あけみ・溝川 藍・杉山雅俊・井 陽介 (2018). 幼稚園教育実習を通じた学生の学び：実習指導の効果 明治学院大学心理学紀要, 28, 33-47.
- 長谷部比呂美 (2007). 保育実習に関する学生の意識について—実習不安を中心として— 淑徳短期大学研究紀要, 46, 81-96.
- 神谷哲司 (2009). 保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的变化—実習時期と就職活動をつうじた進路選択過程に着目して— キャリア教育研究, 28, 9-17.
- 厚生労働省 (2019). 保育士有効求人倍率 厚生労働省 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/000555105.pdf> (2019年11月3日)
- 松田侑子・設楽紗英子・濱田祥子 (2016). 保育系実習用予期せぬ現実尺度の作成 心理学研究, 87, 384-394.
- 三木知子・桜井茂男 (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 小河妙子・長屋佐和子 (2015). 保育士養成課程に在籍する学生の職業認知が保育者効力感に及ぼす影響 名古屋女子大学紀要, 61, 109-115.
- 外山美樹 (2005). 認知的方略の違いがテスト対処方略と学業成績の関係に及ぼす影響—防衛的悲観主義と方略的楽観主義— 教育心理学研究, 53, 220-229.